

二次元ポチ文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

斐斐之嘉和

表紙イラスト／高浜太郎

新
呪い屋零2
—御影陵辱編—
ZERO
外伝

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『新・呪い屋零2外伝 御影陵尋編』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『呪い屋零1～3』『新・呪い屋零1～3』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



新 呪い屋 零2
— 御影陵辱編 —
ZERO
外伝

斐芝嘉和
表紙イラスト／高浜太郎

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

はがみかげ

羽賀御影

羽賀大社の跡取り娘。秘密結社ORGANONの敵として、足田たちに囚われる。

ささきれい

佐々木零

「呪い屋」の通り名で知られる凄腕の呪術師。御影とは学生時代からの友人。

ふたばりっか

双葉六花

小柄童顔の少女。秘密結社ORGANONの一員。

みしまかよこ

美島加世子

長身の大人びた眼鏡娘。六花と同じく秘密結社ORGANONの一員。

ひきたつねきち

足田常吉

通称「拝み屋」。人を拝んでその身体を操る呪術を使う。零と敵対している。

埃っぽい絨毯の上に、御影^{みかげ}はうしろ手に縛られて転がされていた。

倒産したホテルのロビー。スプリングの飛び出したソファや脚の折れたテーブルは壁際に押しやられ、大きな窓や回転扉はベニヤの板で閉ざされている。街から離れているのか、外からは風鳴りくらいしか聞こえてこない。

「ふう……ンうう、ふ、は……」

カビ臭い闇に響くのは、御影の唇からこぼれ出す甘やかな吐息。床に広がる艶やかな黒髪が、波間に躍る海藻のようにユラユラと揺れた。悩ましげに歪められた美しい眉、涙に濡れた黒目がちの瞳——巫女服の襟元からこぼれ出た瑞々しい乳肌は、ほんのり桜色に染まっている。

（こ、こんな……こと……で……）

唇を噛んで恥ずかしい声をこらえようとすると御影の尻から、ウンウンウン、と低い機械音が漏れていた。菊門をこじ開けて深々とねじ込まれたアナルローターと、膣の奥まで挿し込まれたイボつきバイブレーターの作動音。

淫らな振動に掻き回された肉穴には心地よい電流が渦を巻き、腰骨まで蕩けてしまいうだった。突き揺すられた子宮に熱い溶岩が溜まる。横たわった身体が芯から火照り、全身に香汗が滲む。

呪術テロリストのシンパ・双葉^{ふたばりっか}六花^{むしまか}と美島^{みしまか}加世子^{よこ}たちに囚われてからどれくらい経った

のか——延々と続く淫悦地獄に、意識が蕩けかけていた。時間の感覚が薄れ、澱のように蓄積した疲労でさえ心地よく感じてしまう——と。

「いい仔になったかしら、お嬢様？」

舌足らずな少女の声が聞こえ、小さな足音が近づいてきた。白いブレザーを纏った黒髪の少女。おっとりとした表情の、眼鏡をかけた大人びた少女も一緒だ。

「ふ、双葉、さん……美島、さん……」

朦朧とした頭を動かし、御影は少女たちを見上げる。わずかに動いたただけなのに、胸先に鋭い感覚が閃いた。痾り勃った乳首が上衣の裏地に擦れたのだ。身体がビクツと捻れ、閉じた太腿に力が入って、肉穴の奥で蠢くいやらしい玩具をよりハッキリと感じてしまう。

「こんな、こと……無意味、です……もうやめに、し、ません、か……」

喘ぐ唇を無理矢理動かし、御影はようやくそれだけ言った。頭の中に桃色の靄が垂れ込め、言葉を紡ぐことが難しい。気を引き締めているつもりなのに声が波打ち、ともすれば甘えた鳴き声になってしまう。

「まだそんなこと言ってるの？ 困った仔ねえ」

苦笑した童顔の少女——六花が御影のうしろへ回り込み、緋袴に手をかけた。前にしゃがみ込んだ美島は巫女服の身体に手を回し、わずかに浮かせて、脱がすのを手伝う。

「な、なにを……ああ」

火照った尻肌に微風を感じた。緋袴が下ろされ、桃尻が露わにされたのだ。空気に撫でられた尻孔がキュウツと窄み、アナルローターを締めつけた。パイプを咥え込んだ肉アケビは淡く疼き、指で滅茶苦茶にしごきたくなる。

(淫蟲が、こん、な、に……)

膣や直腸の裏側に、イトミミズのような呪的生物が巣くっている。快感を餌にして成長し、精液を糧にして増殖するソレは、性欲を掻き立てて肉穴を疼かせ、御影を淫女に作り替えようとしている。

いつもの御影であれば、自分を辱めようとする相手には冷ややかな笑みで応える。だがいまは、美眉は悩ましげに歪み、長い睫は涙に濡れて、悔しそうに唇を噛むのが精一杯。

「おトイレの時間よ。さあ、恥ずかしがらないで」

クスクス笑った六花の指が、尻孔から突き出た振動玩具を掴んだ。

——くぼん、くぼん、くぼん。

括約筋を弾きつつ、抜け出てくるゴムボールの数珠。ひとつ抜け出るたび伸縮を強制された尻孔に、熱い感覚が弾けた。掻き出されて捲り返った排泄粘膜は、埃っぽい空気に撫でられ、心地よく痺れる。

「ふ、あ、ううう……あつ!? ン、ンううつ！」

ぐじゅりゅ、ぬぬ、ぬじゅちゅ!

膣からイボつきバイブレーターが引き抜かれていく。イボイボに揉み立てられる壺口、尖端の瘤にしごかれるGスポット。太さが退いていくと膣奥に真空状態が生まれ、子宮口がチュウチュウと吸い立てられた。

「くうう、んううう……」

ぬじゅぽん！

ようやくすべてが抜き出されると、火照った淫穴に冷たい空気がドツと流れ込み、恥丘の奥に微弱電流が湧き上がる。

（うう……か、感じて、しまうう……）

粘膜の裏側でゾワゾワ蠢く淫蟲のせい、いつもなら感じ取れないような小さな刺戟でさえ、ぷっくり膨れた膣壁には心地よい愛撫となった。淫穴の奥を無数の細筆でくすぐられていたような感覚。悦びの細波が背を這い上り、意識が白く塗りつぶされていく。

「いやらしいお嬢様ねえ。オマ○コが捲れ返って奥まで覗けるわよ。いやらしい涎をダラダラ垂らして——そんなにバイブが気持ちよかった？」

「う、ううう……あ？ な、なにを……」

恥辱に打ちのめされているヒマもない。美島と六花に脇を抱えられ、引き起こされて、しゃがんだポーズにさせられる。

「トイレだって言ったでしょう？ ほら、グズグズしない！ 私たち、忙しいのよ」

手品のように指先に呪符を現させた少女が、闇を掻くように手を振った。呪文の書かれた短冊が光の粉を散らして消え、代わりにアルミ製の洗面器が現れる。

「お嬢様がいい仔にしてくださいださったら、私たちもこんなことはしませんのよ」
申し訳なさそうに言った美島が、御影の尻の下へ洗面器を挿し込んだ。

「こ……これに!？」

思わず訊き返す御影。気持ちよさそうに弛んでいた頬がみるみる強張り、耳の先まで真っ赤になる。こんな場所で、こんなモノに——渦巻く羞恥、膨れ上がる屈辱感。

「贅沢言わないの! お嬢様はいま、私たちのホリヨなのよ!」

「ふあっ!! あ、や……ああん!？」

薄闇にぼんやり輝く桃尻が六花の小さな手に揉まれ、洗面器に向いた肛門には揃えて伸ばした二本の指が挿し込まれた。

クニクニ、クポクポ。

芋虫のように蠢く細指に、括約筋が揉み解されて排泄粘膜が掻き回される。弄られた菊膜はたちまち気持ちよくなり、腹の中が一気に燃え上がった。

「や、やめ……ふあうっ!？」

肛悦が掠れるほどの快感が、股間に閃いた。蜜まみれの肉アケビに、美島の指が潜り込んできたのだ。

「オシッコも一緒に出してくださいね」

「ひう、う、うううんッ！」

指先に呪いがかかっているのか、肉割れに感じる細指は氷のように冷たかった。くちゅ、くちゅ、と卑猥な音を立ててしごかれたビラビラから、狂おしい火照りが拭い取られる。だが気持ちいいのは一瞬だけで、指が離れた途端強烈な疼きがぶり返してくる。奪われた熱を補填するように、沸騰した血潮が淫唇に流れ込むのだ。

「ソう、く、ううう！」

肉割れの中に悦びと疼きがせめぎ合う。指の腹でしごかれた尿道孔がウズウズし、爪で軽く突かれたクリトリスには強烈なスパークが弾けた。

「あは！ ウンチの穴がヒクヒクしてるわ！ 指がしゃぶられる！」

グリリ！ グリリ！

六花の指に挟られる尻孔。乱暴なはずのその動きが、いまはとても気持ちよかった。

（ああ、ダメ、やめて……で、電気、があっ！）

少女たちに弄ばれた双穴の間に、ビリビリした感覚が往復する。8の字に繋がった括約筋を、快感電流が駆け巡っているのだ。

ズズウン……ズズウン……。

不穩に蠢く直腸粘膜。括約筋が揉み解されたせいで、便意が刺戟されている。肉の潤み

を掻き回す細指の冷たさは、繊細な粘膜を染み抜けて膀胱に浸透し、ヘソの下に熱いモノが溜まり始める。

ダメだ、こらえなければ——喰い縛ろうとした歯の根が合わない。揉み解された尻孔から温かなモノが湧き上がり、深く挿し込まれた指がシャクトリムシのように動くたび喉の奥から淫らな吐息が溢れ出してくる。冷たい指先でピラピラを弾かれると脛の裏に閃光が走り、クリトリスを掴まれると眩い稲光が脳天を突き抜ける。

気が遠くなるほどの快感。

だが、悦びに身を委ねられない。

高まる肉悦に比例して、下腹部の蠕動も激しくなる。きゅるるる、ぎゅるるる、と高まらない音を立てて捻れる直腸。美島の指が蠢くたび膀胱が膨れ、尿道が熱くなる。

「い、いや……やめて、お、お願い……やめてえ！」

耳の先まで真っ赤に染め、額に真珠のような汗の粒を浮かせた御影は、美島の胸に顔を埋めてついに叫んでしまった。もうダメだ、こらえられない。プライドよりもなによりも、排泄を見られる恥ずかしさのほうが遥かに強い——だが。

「さあ、おウンチしましょうねえ、お嬢様」

ぬぼん！

勢いよく引き抜かれる細指。縁を引っかけられた肛門が捲れ返り、甘い衝撃が直腸を走

り抜けた。辛うじて保たれていた均衡が崩れ、ギョルルツ!! と捨れる排泄器官。

「ふあっ!? あ、ああダメ、出ちやう出ちやう、出ちやううッ!!」
腹の奥底から熱い津波が駆け下り、痺れる肛門を押し退けて――。

ぶしゅっ! ぶじゅじゅ、ぶぱぱっ!

上品な御影からは想像もつかないほど破廉恥な音を響かせ、液状の汚物が噴き出した。直腸を絞る動きが前にも伝わり、

びゅびゅっ! びゆるるるるるる!

尿道孔から熱い小水が堰を切ったように迸る。

しばたたたたた、ぼたぼた、べちやちゃ……アルミ製の洗面器を叩いて滑稽な音を響かせる排泄物。

(ああ、出てる、出てるうう……止まらない、止まらないいい……)

震える理性を無視し、下腹部に充満する解放感。とぐろを巻いていた便意がウソのように消えていき、死にたくなるほど恥ずかしいのに気が遠くなるほど心地よい。

「ふああ、ふああああ……」

美島の胸に身体を預けた御影は、紅く染まった顔を上げて緩んだ声を漏らした。涙に濡れた長い睫の下で、熱っぽく潤んだ瞳がユラユラ揺れる。吹き荒れる羞恥と込み上げてくる快感に、プライドが引き裂かれ、意識が掠れていく。

「うわ、臭い！ お嬢様のクセに、なんて臭いウンチなの!!」
 六花の嘲笑が、とても遠くから聞こえた――。

* * *

「ひよお！ こりやすげえ！」

巻き舌の上品な声に顔を上げると、いかにも柄の悪そうな男たちが酔ったような足取りで近づいてくるのが見えた。ヤクザの構成員としては軽すぎ、不良少年というにはやや歳を取りすぎている。チンピラだ。

「く……！」

頬を赤らめた御影は緋袴の膝を胸に引き寄せ、長い睫を伏せて顔を背けた。いつもなら術など使えなくとも内から滲み出る威厳で平伏させられるのに、いまは違う。閉じた太腿の狭間ではしたなく疼く秘裂、排泄の余韻にジンジン痺れた肛門――六花と美島は香水を含ませた濡れタオルで身体を拭ってくれたが、それはこの、下劣な男たちに饗するため。

（わ、私は……羽賀の、娘……こんな者たちに……うう……）

陵辱の予感に怯えて震えるのではない。

近づく牡の気配にじゅわ、じゅわ、と潤む肉ビラ、どうしようもなく高まる鼓動――淫らな反応を示す己の身体を恥じているのだ。

「おお、いい匂いがする！ くう、たまんねえなあ！」

獸のように鼻息を荒げた男がひとり、御影のうしろに回り込んで耳元で唸った。うしろ手に縛られた腕の下を潜り、脇から胸へと通される太い腕。

「やつ!? やめなさい……っ!」

「やめなさい、だつてよ」

羞じらう御影を嘲笑うチンピラたち。ほのかに漂う香氣に誘われて歪んだ顔を寄せ、瑞々しい柔肌を粘り着く視線で観察しながら、震える緋袴に手をかける。

「あ……い、いやッ!」

太い腕に膝裏を掬われ、力任せに左右に割り開かれた。緋絹の破れ目に柔肉の畝が見え隠れする。見られまいと必死に身体を揺らすのに——むぎゅ!

「ううっ!」

服の上から乳房を掴まれた。繊細な乳肌がしっとり湿った裏地にしごかれ、肉釣鐘がじわり火照る。擦れ合う乳谷が気持ちいい。押し潰された乳首に熱いモノが弾け、脳裏に閃光が走った。

「おい見ろ、このお嬢様、乳揉まれただけでよがつてるぞ!」

「えっ!? あ、ああ、違う……!」

ハッと我に返って慌てて否定したのに、鼻息を荒げた男たちは聞いていなかった。

「疋田ひきたの爺さんが言っていた通りだ。澄ましちやいるがとんだ淫乱、乱暴にすればするほ

ど感じやすくなるドMなんだな！」

「へへっ！　なら遠慮は要らねえな！」

掬われた脚が引つ張られ、尻が前へ滑る。羽交い締めにされた身体がずり落ち、揉みあげられた乳谷に顔が埋もれた。緋袴の太腿が水平になるくらい左右に大きく割り開かれると、股間の裂け目から恥ずかしい場所が迫り出してしまふ。

（ああっ！　いや、いやいや、こんな恰好……っ！）

肉敵に感じる男たちの視線。

羞じらつて身を振り、自由にならない手足を突っ張つて藻掻くのに、畏から逃れようとする仔鹿のような懸命さが男たちの獣欲を掻き立て、余計に昂らせてしまふ。

「おら、ジツとしてろ！」

左右に伸びる太腿を抱くようにして、脚に取りついた男が尻の下へ手を挿し込んだ。むにゅ、むにゅむにゅ……グリリリ！

「ふはっ!?　く、ンう！」

尻割れがまさぐられ、武骨な指に穿られる肛門。抉られた排泄粘膜に心地よい熱が膨れ上がり、腰から下に力が入らなくなった。神経系まで侵蝕し始めた淫蟲と、淫具と排泄、そして少女たちの指に弄り回されて、菊膜は膣口ほど敏感な性感帯になっていたのだ。

イヤなのに、恥ずかしいのに、どうしようもなく気持ちいい。はう、ふう、と漏れそう

になる恥ずかしい声をこらえるのが精一杯。

「なんだ？ 尻に指突っ込んだだけで急に静かになったな」

「くう、ン、うう……」

汚らわしい排泄器官で感じていることを悟られたくない——耳の先まで真つ赤になった御影は、臉をギョツと閉じて首をねじ曲げた。

なのに男たちは、さらに興味をそそられて震える女体に顔を寄せる。乱れた襟元からはみ出す乳谷をジツと見つめ、赤らんだ耳裏やうなじに唇を這わせ、しっとり輝く黒髪の匂いを嗅いで、

「ケツの穴を穿られて、痛がつてるのか？ ……違うな」

「牝の匂いがする。乳もいい色に染まってきた」

「このアマ、感じてやがる。肛門は調教済みか？ とんでもねえお嬢様だな！」

声高に嘲笑う。

「ち……違いますッ！」

「うるせえ、黙ってる！ いま調べてやる！」

むにゅむにゅ！

柔らかな肉アケビが、硬い指に割り開かれた。プリツと飛び出す粘膜花卉。火照った淫唇に冷たい空気を感じ、御影は息を呑んだ。薄闇に甘酸っぱい匂いが漂いのぼる。

「へへへ、見ろよ、グチュグチュになつてるぞ」

脚の間に這い込んだチンピラが、恥ずかしい場所にペンライトを向けていやらしく笑つた。淫蟲に犯されて羞恥に緊張した繊細な牝粘膜は、浴びせられた光にすら反応してヒクン、ヒクン、と蠢いてしまう。

「ケツ穿られて感じてんだ。なにがお嬢様だ、立派な変態じゃねえか」

「ち、ちが……ちが、うう……」

「なにが違つて？ おら、テメエの目で見てみな！」

髪を掴まれ背を圧され、己の秘部を覗き込まされた。目に飛び込んでくる、茹だつたように紅い肉畝、小さな光を浴びてヌメヌメ輝く肉ビラ。

「あ……ああっ！」

クリトリスは包皮を押し退け、粘液に潤んだ紅真珠が顔を覗かせている。尿道はヒクつき、膣口は喘いで、濃密な牝香を含んだ蜜をコポ、コポ、と溢れさせていた。

「こんな濡らしておいて、まだ感じてねえつて白をきる気か？ ああ!？」

髪を掴まれ、乱暴に揺さぶられた。

こんな下劣な男たちに、こんな場所を、こんなことをされて——ひび割れていくプライド。ずっと昔に克服したはずの弱い自分が、心の奥から這い出してきそうになる。

(ダメ……負けてはダメ、泣いてはダメ……)

壊れた理性を掻き集め、震える自分を叱咤して屈辱に耐えていると――。

「まあ待て、乱暴にするな」

噎れた老人の声が聞こえた。昂っていたチンピラたちが動きを止め、声のしたほうに顔を向ける。

「ソレは羽賀のお嬢様だぞ、分かっているのか？ もつと丁寧^{とめきち}に扱え」

闇の中から現れたのは、禿頭の拝み屋――正田常吉。

助けてくれるのか、と、御影は一瞬、期待してしまった。自分は大切な人質のはず。辱めて壊して羽賀と対決することなど、老獪な呪術師は望んでいない……はず。

なのに、この胸騒ぎはなんだろう。

乳房が火照り、乳首が疼く。激しい鼓動に追い立てられた血潮が全身を駆け巡り、身体が芯から熱くなって、頭が煮えてぼうっとしてくる。

「どれ、見せてみな」

男たちを掻き分けた老人は、無防備に割り開かれた御影の股間に顔を寄せた。

(ううっ!?)

積み重ねられた年月のせいか、内から滲み出る呪力のせいか。

正田の視線はチンピラのだれよりも強かった。見つめられただけで肉ピラが疼き、尿道孔がジクジクする。息が吹きかかるほど顔を近づけられると、粘膜器官の奥で膣壁がざわ

めき、恥ずかしい粘液がじゅわ、じゅわ、滲んでしまう。

たっぷり時間をかけて御影の匂いを嗅いだ老人は、目を細めていやらしく笑った。

「バカだな、テメェら。こんなもん、濡れた中に入らねえぞ」

「……ッ!?!」

「言っただろ？ このお嬢様はドMのド淫乱だつて。ちよつと弄られただけで恥ずかしい汁を滲ませるが、満足なんかしてねえんだよ。ほら、マ○コが待ちきれねえつてヒクヒクしてるじゃねえか。指イ突っ込んで掻き回してやりな」

「ああイヤ、やめ……ふあうつ!」

ぐちゅぷ!

卑猥な音を立ててこじ開けられる壺口、しごかれた粘膜に閃く淡い悦感。正田の言葉を真に受けたチンピラが、御影の膣口に太い指をねじ込んできたのだ。

「ひうつ?! は、はうつつ!」

芋虫のようにモコモコ動くソレに尿道孔の裏側を弄られた御影は、湧き上がる肉悦に煽られ、自由にならない身体を懸命に振った。蜜まみれの粘膜が味蕾のようにざらついた場所、Gスポット。蠢く指が刻み込む悦びの細波に、

「やあああ、めえええええつ!」

鳴き声が波打ち身体が捻れ、男の手をかけられていた前身頃が乳房から滑り落ちた。

ぶるるん、たわわん。

薄闇に弾む桜色の胸果。押さえるモノを失った巨乳は捻れる身体に合わせて奔放に跳ね躍り、男たちの視線を誘った。

「見ろ、乳首があんなに紅いぞ」

「でけえ乳暈だな。ピカピカ光ってら」

「ああっ!? 見ないで、ああ見ないでえっ!」

小指の先くらいまで膨れ上がった乳首は、熟しきったグミの实のようにピンピンに張り詰めていた。男たちに見つめられただけでむず痒くなり、乳房が弾んで空気に撫でられるところえがたい微弱電流が湧き起こる。

「指だけでこんなに勃起させやがって。いやらしいお嬢様だ」

「ち、違う、違う違うちがううっ!」

身体がいやらしいのではない、自分のせいではない。淫蟲のせい、淫らなイトミミズに気の流れを乱されて感じやすくなっているだけ——言い訳を口にするには許されず、

——くにゅ!

「ひいあっ!」

乳首が生まれ、吊り上げられた。キュウツと捏ね潰された肉豆に激感が弾け、乳腺を逆流して肉芯まで響く。尖端を抓まれた肉釣鐘が左右に引つ張られ、桜色に輝く乳谷が開く

と、香汗に蒸れた柔肌が冷たい空気に撫でられて淡い悦びが湧き上がった。

「ふああ、ああ、あああ……あひっ!? ひあ、ひああっ!!」
秘部に炸裂する鮮烈な感覚。

剥き身のクリトリスが軽く抓まれ、先から根元へキュッキュツとしごかれたのだ。

「やうっ!? やひ、ひあ、ひああアアンっ!」

乳房の先と恥丘の先に、次々とスパークが弾けた。捻れる身体、痙攣する太腿。

「うは! いやらしい穴だ、指がしゃぶられるぞ!」

「こっちもだ。犯られ慣れてる尻だな、肛門が絡みついてくる!」

肉孔を指で犯した男たちが、悦びの声を上げた。

クポクポクポ、と小刻みに責め立てられる尻孔。クチュクチュクチュ、と卑猥な音を立てて掻き回される蜜壺。

「あああんううっ! やめ、ああダメ、あああああつ!」

閃く快感に背筋が捻れ、絶え間なく押し寄せる肉悦の荒波に理性が押し流されていく。

(イヤ、いやいや、身体が、勝手にいいっ!)

腰が浮き、カクン、カクン、としゃくり始めた。より強い激感を求めて自ら尻を振り、深々と挿し込まれた男根にさらに奥を突いてもらおうとしているような、淫らな動き。

「なんだコイツ、自分からケツ振り始めたぞ?」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>